
わたしのなまえ

MCおもむろ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

わたしのなまえ

【Nコード】

N7774A

【作者名】

MCおもむろ

【あらすじ】

少女の名前を、聞いてはいけない。

（前書き）

（！警告！） 真夜中ですか？部屋の電気は消しましたか？画面に近づいて見てますか？すべてに当てはまる方。ひとまず電気をつけましょう。目に悪いので（笑）

今日は寝苦しい夜だった。

蒸し暑いのにクーラーの調子が悪い事と、なによりあの噂を聞いたからか。

怖がりの僕が聞いていい代物じゃ無かった。その証拠に、僕は夜中にもかかわらず、部屋の電気を点けたままだ。

僕は自室のベットの上で何度も寝返りを打っていたが、やがて瞼が重くなり、そして眠りについた。

目を開く。

自室の白い天井。

無意識に僕はむくりと上半身を起こした。そして視線を真横に移す。そう、それが必然であったかのように。ドラマの脚本に沿うように。

部屋の隅、他とは違って少し薄暗いそこ。

少女が、いた。

シミのある、薄汚れたワンピースを着て、そこから露出した肌は青紫。

表情は見えない。少女は髪が長いわけじゃない。何やら、歪みのような、映りの悪いテレビのような。そのせいで、少女がひどく違う世界の人を感じる。まるで合成写真のようだ。
少女がどこを見ているかもわからない。

僕は少女に話し掛けた。

そう、当たり前のように。

「君は……だれ？ 名前はなんて言うの？」

「……たし？ ……わた……は……」

耳鳴りが聞こえ、ひどく聞き取りづらい。ノイズのような。そのため、少女の声は遠くで呟くみたいに、近くでささやくみたいに。

そのせいで僕は眉をしかめた。それがわかったのか、少女は笑った。

いや、更に空間が歪んだのかもしれない。

「わたしのなまえは」

目を開く。

……目を開く？

視界には白い天井。……そうか、夢だったのか。

名前……。その単語を思い出し、僕はぞっとする。

気が付けば、全身にじつとりと汗をかいていた。動くと、衣服が肌に張り付いて気持ち悪い。

無理もない。冷房が効かない上に、あの夢だ。

夢の最後に、少女に呟かれた直後、僕は目が覚めた。

いや、少女に呟かれて、目が覚めたみたいな感覚だ。今でも鮮明に、耳にこびりついて離れない。

喉がカラカラだ。僕は水道に向かうため、上半身を起き上がらせた。

少女が、いた。

縦長のベットの、僕が足を向けるほうに、立っていた。

全身が泡立つような感覚。頭が真っ白だ。逃げるという選択も、せめて目を逸らすという選択も、今の僕には無かった。

少女の行動を待つように、僕は少女を凝視していた。

空間が、歪む。

少女が、笑う。

「わ……しの……な……えはね……」

ノイズが耳にこびりつく。

その時僕は、強迫めいた物を感じた。

聞いてはいけない。

名前を聞いてはいけない。

何かを言わなくては。

頭で考えるより早く、口が先に動く。

が、喉がカラカラで言葉がでない。口の動きだけが空回りしてしまふ。少女は今にも口を開きそうだ。

僕の……僕の……

「……もう僕の前に現われるな！」

視界には白い天井。

僕は自分の発した声で目が覚めた。
汗の量は夢よりひどい。

起き上がり、自分の部屋をせわしく見回す。

「……………いない……………よな？」

カーテンの隙間からは、低い位置にある朝日がちらつき、僕はホツとした。

自室を抜け、階段を下りて、リビングへのドアを開く。

「おはよう。あんたにしては起きるのが遅いじゃない」

リビングテーブルに座り、コーヒーをゆったりすすっている人物に安心する。

「そうかな。それより姉さん、仕事は？」

姉さんは僕を呆れたように見る。

「何言ってるの、今日は日曜よ？ ……誰？」

不思議そうな顔の姉さん。たぶん、僕も同じ顔をしているだろう。

「その後ろの女の子」

途端、僕は固まる。動けない。

姉さんの不思議そうな顔は、僕に向けられたものじゃなかった。

「ん？ 親戚にこんな子いたっけ？」

背中が寒い。

振り向いてはいけない。いや、振り向けない。動けないのだから。

僕は顔を前に向けたまま、姉さんの行動を見張った。

姉さんは微笑みながら、こちらに歩いてくる。

しゃがみ、僕の腰の横を見る。

「お名前、なんて言うの？」

「わたし？」

耳元で聞こえる。

ノイズが、響く。

「わたしのなまえは

（後書き）

どうでしたでしょうか？ネタもオチもありきたりでしたね（苦笑）
少しでも『怖い』と思っていただけたら、作者は小踊りしてしまう
でしょう。いえ、踊り狂います。いえ、踊り狂ってみせます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7774a/>

わたしのなまえ

2010年11月10日10時48分発行